

佐賀商業野球部のエース石丸進一は無骨で頑固、融通のまardenきかない佐賀県人特有の異風者（いひゅうもん）である。時は戦局拡大の一手前、旧制高校特有の雰囲気の中で進一や若菜東三、古賀信次郎、南里光義らは「戦時下の青春」を謳歌していた。禁制の男女交際、煙草、映画見物、喧嘩沙汰。

すでに進一の兄藤吉は結成されたばかりの職業野球団・名古屋軍（中日ドラゴンズの前身）に在籍して活躍中で、給料の半分を実家に送金して父の莫大な借金の肩代わりをしていた。「喉から火のずつごたる練習」を終えた夏の夕暮れから火のずつごたる練習を終えた夏の夕暮れ、進一は一人の美少女に出会う。桜井圭子。東京生まれの知的で清楚な香りのする圭子に進一は激しい恋をする。石丸進一、17歳。昭和16年3月。進一は一家の苦境を好きな野球で支えるべく職業野球界入りを決意する。17年春、有力選手の出征で戦力不足に悩む監督小西得郎は進一を抜擢した。名古屋軍投手石丸進一のデビューである。この年17勝13敗。そして、翌18年20勝12敗の成績をあげ、剛腕本格派としてエースに成長した。

来去止島

昭和18年10月21日。学徒出陣式。日夜大夜間部に在籍していた石丸進一も動員されて応召する。土浦海軍航空隊。海軍飛行予備学生としての過酷な訓練と制裁の日々。軍隊では人間は一個の武器でしかない。自我を殺す日々との葛藤。鹿児島県、出水海軍航空隊基地での訓練飛行。

昭和19年冬。敗色濃い戦争に軍部は特攻作戦を決定。未熟な飛行生徒たちは志願を宣言する。行方の知れなかった桜井圭子との日比谷公園での再会。
圭子「……。母が、今日……遅くなってもいいって」

そして、永劫の別れ。死への不安と生への渴望の狭間で進一と圭子の愛は激しく燃える。昭和20年冬。鹿児島鹿屋基地。次々と繰り返す特攻機の無残な結果を特攻隊員たちは知る由もなく、己の死の意味を見出そうと苦悶する。圭子は空襲で死んだと知らせる圭子の母からの手紙とともに、進一の出撃の朝が来る。進一は特攻機の前で別れの杯を投げつけ、かつて六大学で活躍した同期の本田耕一を相手に最後のピッチングを始める。

進一「昭和20年5月10日……。いよいよ明日を期して24年の短い生涯を終わります。わたしの野球生活は僅か3年余り。しかし、野球のお陰で親兄弟に幾分つくし得たことがせめてもの慰めです。……出発前に、あの時頂いたニューボールで最後のピッチングをいたします」

ドルトラの「思い出」が流れた。
進一「……。（投げて）親父っ」
本田「受けて）ストライクっ」
進一「……。（投げて）おふくろっ」
本田「受けて）ストライクっ」
進一「……。（振りかぶりながら、咳く）古賀信次郎っ。……若菜東三っ。……南里光義っ。……佐賀、鍋島三十五万石の城下町っ。（投げる）本田「受けて）ストライクっ」
進一「こいは俺とおまえの魂のキヤツチボールぞっ、圭子っ」
1990年10月の初演から感動と伝説を生み続ける名作ついに松浦最後の公演。

キャスト



岡部大吾 いわいのふ健 五歩一豊 中島文博 山本翔三 今井徳太郎 飯岡まなみ
館形祐子 中垣美奈 江川 敦 又吉隼之介 高橋裕太 橋本利貴

『太陽の塔』 予告 2011

1970年。岡本太郎とその時代

2011年
6月7日(火)～13日(月)
於：新宿紀伊國屋ホール
作・演出 岡部耕大

転げるほどに笑っちゃう！
「俺は岡本太郎を演じきって死ぬよ」
「あれは「太郎の塔」じゃねえ。「太陽の塔」だ。」
「俺には過去もなければ未来もない。
この瞬間瞬間に爆発する。それだけだ。」

◆スタッフ
作・演出／岡部耕大
美術／根来美咲
照明／西尾憲一
音響／権藤円
衣裳／松竹衣裳
写真／山本悟正
宣伝美術／岡部 萌子
題字／岡部耕大
舞台監督／上林英昭
企画・制作／岡部企画